

エンバク・ベッチの施肥法

川嶋次夫・遠山良樹・福本 勇
(宮崎県農業試験場)

飼料作物としてエンバク・ベッチを栽培するには一般に混作しているが両作物の養分要求度は一様でないから施肥の効果を高めて増収を計るためには単作すべきものとする。施肥量と面積とを等しくして単作・混作の両作物の収量・飼料価を比較した。

試験方法：本場内畑，1区面積0.4a，2連，日向改良黒燕麥，コンモンベッチ，50cm条播，11月1日播種0.35kg/a，施肥量は第1表のとおり，刈取り燕麥出穂期。

第1表 施肥量 (kg/a)

成分		N	K ₂ O
区名	標準混作	1.0	1.0
		1.0	1.0
	A { エンバク	1.5	1.5
		ベッチ	0.5
	B { エンバク	2.0	1.5
		ベッチ	0.0
	C { エンバク	1.5	2.0
		ベッチ	0.5
D { エンバク	2.0	2.0	
	ベッチ	0.0	0.0

N：尿素， K₂O：塩加 P₂O₅：1.5重焼燐
マグカル：15 マンガン肥料：1.0
以上各元肥で施用

第2表 収量 (生草重kg/a)

区名	収量		合計	DCP	TDN	
	エンバク	ベッチ				
標準混作	454.4	48.9	503.3	8.5	67.3	
単作	A	293.0	118.1	411.1	8.5	54.1
	B	320.0	106.3	426.3	8.5	56.3
	C	296.8	140.7	437.5	9.4	57.4
	D	310.6	102.6	413.2	8.3	54.5

試験結果：生草収量は第2表のとおりでエンバク・ベッチの合計では混作区が最高で503kg/aを示すが、ベッチでは単作C区が141kg/aで最も多収であり、これに次いで同A区が118kg/aであった。即ちベッチにはN0.5kg/aがよくK₂Oの施用量とは関係が見られなかった。エンバク収量は混作区が最高であるがそれは作付実面積が大である結果で単作相当面積で比較すればその殆ど即ち277kg/aの収量となつて単作各区に劣ることになった。単作区間の比較ではB区320kg/a，D区311kg/aでN2.0kg/a施用が何れも高い収量であり，K₂O施用との関係は見られなかった。TDNは混作区が，DCPは単作C区がそれぞれ最高を示し飼料の目的に応じて混作或いは単作すべきことがわかつた。Nの吸収量は第3表のとおり単作区が何れも混作区の1005g/aより多く単作中ではC区が1200g/aで最高を，A区が1080g/aで最低を示した。これに対してP₂O₅，K₂Oは混作区が単作の各区にまさりそれぞれ400g/a，1800g/aで最も多量を吸収した。

第3表 三要素吸収量 (g/a)

区名	吸収量	N	P ₂ O ₅	K ₂ O
		標準混作	1,004.7	396.8
単作	A	1,077.3	316.4	1,346.2
	B	1,111.8	328.9	1,428.9
	C	1,198.8	361.7	1,281.6
	D	1,116.5	325.8	1,393.8